



むすんで、うみだす。

Lib.

京都産業大学図書館報

Vol.47, 増刊号

(Jan. 19, 2022)



第16回京都産業大学
図書館書評大賞

入賞作品掲載号

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品および講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-11
<佳作>	12-21
アンケート	22
統計	23
書評大賞講演会関連	24-27
磯田道史氏「私の読書と書評ぐらし」	
概要	28

入賞者発表

第16回京都産業大学図書館書評大賞には118篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順

大賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
こんどう じん 近藤 陣	現代社会学部 現代社会学科 3年次生	宇宙人の目 『地球星人』(村田沙耶香著)

優秀賞

たかはし もえ 高橋 萌絵	文化学部 国際文化学科 4年次生	約束されたバッドエンド 『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』(桜庭一樹著)
ひらい ゆうこ 平井 由美子	文化学部 国際文化学科 2年次生	影を持つ私たち 『影をなくした男』(シャミツソー作；池内紀訳)
まつい あかり 松井 茜里	文化学部 国際文化学科 2年次生	『きらきらひかる』と現在のLGBTQ 『きらきらひかる』(江國香織著)

佳作

くが こうせい 久我 幸生	現代社会学部 現代社会学科 2年次生	愛するということ 『愛するということ』(アーリッヒ・フロム著；鈴木晶訳)
こいで そうた 小出 奏太	文化学部 国際文化学科 2年次生	リラックスなんかせえへんよ。 『一投に賭ける：溝口和洋、最後の無頼派アスリート』(上原善広著)
すどう たかひろ 須藤 崇太	現代社会学部 現代社会学科 3年次生	多様性の普遍的な問題 『お姫様とジェンダー：アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』(若桑みどり著)
たにおか いさむ 谷岡 武	経済学部 経済学科 3年次生	誰が悪いのか 『トクカイ 不良債権特別回収部：バブルの怪人を追いつめた男たち』(清武英利著)
つかもと ゆうま 塚本 侑聖	経営学部 マネジメント学科 1年次生	自己の曖昧さ 『グッド・バイ』(「メリクリスマス」)(太宰治著)

選考経過と全体講評

図書館書評大賞イベントと書評大賞選考結果によせて

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 西村 佳子

今年は、コロナ禍で1年間休止していた図書館書評大賞を再開し、第16回図書館書評大賞を実施することができた。117名の学生諸君から118篇もの応募があったことは望外の喜びである。本に向き合う機会が増えたことは、コロナ禍により室内で過ごす時間が増えたことの数少ない恩恵だったのかもしれない。

京都産業大学図書館書評大賞は、6月7日、国際日本文化研究センター教授の磯田道史先生をお招きし、「私の読書と書評ぐらし」と題したオンライン講演会の開催で幕開けとなった。講演でのお話は多岐にわたり、9歳の磯田少年が弥生時代の土器のかけらに出会い、それを再現するために本を読むようになったという話や、自己流では再現できなかった弥生式土器が、本を調べて釉薬として鉄分を混ぜるという知識を得たことで再現できた、という大器の片鱗を感じさせるエピソードが披露された。このエピソードに関連して、磯田先生は、読書や資料にあたることの利点は、「人類が1万年近くかけて獲得した知識を、空間と時間を超えて短時間で会得できること」と、歴史学者ならではの表現で説明された。

磯田先生の体感では、読書経験を積むと著者の主張を短時間で読み取れるようになり、真に重要な部分は1冊の本の5パーセント程度、精読すべき本は20冊に1冊ぐらいだと感じる、とのことである。精読すべき1冊を見つけるために、できるだけ多くの本を手にとってペラペラとめくることが大切、というお話は、寝食を忘れて本を読むあまり図書館で倒れて運ばれたことがある、という磯田先生ならではのものではあった。講演では、ネット書評空間「ALL REVIEWS」や新聞書評についても紹介をいただいた。今後の読書に役立てていただきたい。408名の講演会参加者の方からは多くの質問がチャット等で寄せられ、そのいくつかに興味深い回答をいただいたことも申し添えておく。

さて、本年度の書評大賞には118篇の応募があり、第1次選考と第2次選考を経て大賞1名、優秀賞3名、佳作5名が選ばれた。入賞作品の詳細は講評に譲るとして、今年の特筆すべき傾向は、書評の対象に選ばれた書籍の多様化である。以前、書評の対象は小説だけではないということを伝えるために「(前略)社会科学系の学生諸君で小説は苦手、という人は国際政治に関する歴史本や評論、ノンフィクションを選んでもよいだろうし、理科系の学生諸君の場合は、科学者が書いた随筆を選ぶという選択もあるだろう。」と書いたが、今年は多様な分野から書評が集まった。文学作品だけでなく、イスラームの思想と食に関わる論評、魚介類を題材に多角的な社会分析を行った論評、経済事件やアスリートに関するノンフィクション、紀行エッセーなどの本について、内容が紹介され、批評され、その魅力が伝えられた。好きな分野やよく理解できる分野の本を書評の対象に選べば、その魅力を伝える熱量が高くなり書評の文章にも勢いや魅力が溢れる。

書評の効用のひとつは、世代や立場を越えて同じ作品について語り合うきっかけとなり得ることである。閉塞的な状況が続く中ではあるが、書評を書く人と書評を読む人、同じ本を読んだ人同士、またはこれから読む人の間で、本を通じた対話の輪が広がることを願ってやまない。最後になったが、ご協賛いただいた京都産業大学同窓会、丸善雄松堂株式会社、株式会社紀伊國屋書店の皆様、そして多忙な中で選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方および職員の皆さんにあらためて厚くお礼を申し上げる。

第16回 京都産業大学図書館書評大賞

現代社会学部 3年次生



大賞

こんどう じん
近藤 陣



書名：『地球星人』

著者：村田沙耶香

出版社・出版年：新潮社，2021

「宇宙人の目」

人間にとって“正常”とは何だろうか。人間にとって“常識”とは何だろうか。ある人は、それを隷属すべき所与の価値規範として捉えるだろう。ある人は、考えるに値しない瑣末な問いだと吐き捨てるだろう。著書「地球星人」は、我々の価値の根底を揺るがしかねないが故に目を向けることすら憚られる問いを、否応なく突き付ける。

当作品は、“正常”に染まりきれない人間の、世界認識と生き方を辿った物語だ。この文言から察せられるように、視点人物である主人公〈奈月〉は、倒錯的な人物として描かれる。常識から逸脱した世界観を持つ故に、幼少期から家族に奇異の目を向けられており、そうした周囲の人間との錯誤はより一層彼女の特異な認識を強めていく。そして、奈月の中に「自身は“異星人”だ」という意識が芽生える――

さて、先に断っておこう。作品の本質は、認識それ自体にある。したがって、奈月に芽生えた意識が妄想上の話か否かといった思議は、ここでは意味を成さない。主眼を置くべきなのは、彼女が“何をどう捉えているか”についてだ。上述の通り、それは周囲の人間にとっては倒錯的で、逸脱した認識に他ならない。しかし、彼女自身からしてみれば、その視座は何も荒唐無稽なものではない。視点人物として描き出される奈月の心象は、寧ろフラットな視点で世界を映し出している。そこでの人間に対する見方は、我々を囚われた視座から解放してくれるものでもある。殊に、次に示す作中の文章には彼女の認識が如実に表れている。

「私は、人間を作る工場の中で暮らしている。私が住む街には、ぎっしりと人間の巣が並んでいる。ずらりと整列した四角い巣の中に、つがいになった人間のオスとメスと、その子供がいる。ここは、肉体で繋がった人間工場だ。私たち子供はいつかこの工場を出て、出荷されていく。出荷された人間は、オスもメスも、まずはエサを自分の巣に持って帰るように訓練される。世界の道具になって、他の人間から貨幣をもらい、エサを買う。やがて、その若い人間たちもつがいになり、巣に籠って子作りをする。」

読み取れる通り、奈月は人間という存在を鳥瞰的に捉えている。それは即ち、人間と異星人である自身との隔たりを自認するということでもあり、次第に「“正常”な人間でなければ」という意識を強めていくことになる。強烈になった意識は「なにがあってもいきのびること」という言葉として顕在化する。このフレーズは文中に幾度となく登場し、奈月にとって自己暗示、或いは一種の強迫観念のようなものとして作用する。そして、作品のメッセージが集約された一文とも言える。では含蓄される意味は何か。奈月の自己への認識が窺える心象描写から、それは浮き上がってくる。

「私はこの街で、二種類の意味で道具だ。一つは、お勉強を頑張って、働く道具になること。一つは、女の子を頑張って、この街のための生殖器になること。私は多分、どちらの意味でも落ちこぼれなのだと思う。」

「早く、もっと、世界にとって邪魔じゃない、便利な道具になれますように。」

世界の道具として、工場の部品として適切であることが求められ、そうでなければ淘汰される。周囲から常に粗略な扱いを受けてきた奈月は、強くそのことを理解していた。「なにがあってもいきのびること」とは、つまり、生きるために人間という種にとって都合の良い存在であり続けることを意味する。社会を回す歯車であると同時に、人間という種を繁栄させるための生殖器として正しく機能すること。それが人を人たらしめている“正常”である。

人間が生物である以上、種の保存と繁栄は正当化される。故に、家庭を築くこと、恋人との営み、労働によって命を繋ぐことなど、人間に浸透しているあらゆる価値や欲求に対して、訝しげに思うことすら生まれにくい。当著「地球星人」は、そういった“正常”に迎合することしか出来ない人間の脆弱性、そこから生じる人間の排他性を浮き彫りにしている。物語が進むにつれ、奈月の在り方は生き延びることではなく“生きること”を求めて変遷していく。そこで描き出される異星人としての世界認識は、信じて疑われることのない“正常”という価値、或いは蒙昧な存在としての人間を相対化するメタファーとして機能している。つまり、表題である「地球星人」とは、異星人から見た人間のことだったのだ。

“正常”を盲信して生き延びている我々人間は、誰もが「地球星人」だ。我々が見れば、異星人としての生き方を選択していく奈月の姿は、目を背けたくなる程おぞましいものだろう。しかし、ただ一つ言えることがある。“正常”に抗う彼女は、生き延びているのではなく、まさしく“生きている”。もし目を向ける勇気があるのなら、その姿をあなた自身の目で確かめてみてほしい。必ずや、新たな視界を齎してくれる。

選考委員による講評

選考委員代表 現代社会学部教員 加藤 敦典

書評の第一の目的は、読者をその本まで連れてくることだと思う。その点でこの書評は成功している。解説としてはかなり抽象的な書きぶりだが、それゆえに、どんな本だろう、気になることが書いてあるような気がすると思わせることができている。内容紹介を最小限にとどめ、本書が正常と異常、生き延びることと生きることなど、いまを生きる私たちにとって切実なテーマをかかえた作品であることの指摘へとまっすぐに進んでいく点もよい。

書評の第二の目的は、実際に本を読むときの道案内になることだ。本書の内容は非現実的である。しかし、評者がいうように、それこそがこの物語の核心でもある。そのことを指摘してもらっているおかげで、私たちは迷子にならずに物語を読み進めることができる。

書評の第三の目的は、作品を批評することだ。この書評では、認識と視点の問題に焦点を当ててそれを実行している。「正常」に迎合することしか出来ない人間の脆弱性、そこから生じる人間の排他性」という指摘はみごとに本書の核心についており、作品のアクチュアリティをしっかりと切り出しているように思う。

文が短く歯切れがよい。また、ところどころにふだんあまり使わない言葉がちりばめられているのもよいアクセントとなっている。

入賞者から一言

大賞としての選出、大変光栄に存じます。今回、私が愛読している村田沙耶香作品を扱うことにしました。一読すれば、その独自の世界観をご理解いただけるかと思えます。本書評が関心を寄せるきっかけとなれば幸いです。



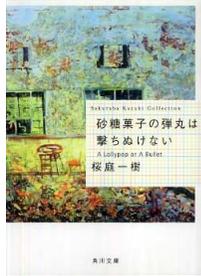
第16回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

文化学部 4年次生

たかはし もえ
高橋 萌絵



書名：『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』

著者：桜庭一樹

出版社・出版年：角川書店，2009

「 約束されたバッドエンド 」

桜庭一樹『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』の主人公である山田なぎさは、自分の部屋も持てない貧乏な女子中学生だ。彼女はとにかく金の稼げる大人に早くなりたいと願い、そのために必要な、生きるのに直接関係のあること——彼女曰く「実弾」——のみを見据え、それ以外のことから目を逸らして生きていた。そんななぎさのクラスに転校してきたのは、海野藻屑というおかしな名前の少女だった。藻屑はテレビの中から出てきたような美少女で、おまけに父親は有名な歌手だという。ブランド品を身にまとった裕福な娘は、こう自己紹介するのだった。「ぼくはですね、人魚なんです。」有り体に言うと、ものすごく変な奴だったのだ。

なぎさは自分とはまるで違う境遇の藻屑に若干の憧れを抱きつつも、実弾にならない余計なもので溢れかえった彼女の言動に呆れ、ひとり冷めていた。しかしそれとは裏腹に、藻屑はやたらとなぎさにつきまとう。仕方なく付き合っているうちに、なぎさは藻屑のことを徐々に理解してゆく。藻屑は決して「恵まれた子」ではなく、むしろなぎさよりももっと「可哀想な子」だったのだ。相変わらず変な奴だけれど、藻屑のその荒唐無稽な言動は、彼女なりの生きる術なのであった。実弾にはならない、熱で簡単に溶けてしまうような、いわば「砂糖菓子の弾丸」とでも言うべきものだった。なぎさは藻屑の健気さに心を打たれ、いつしか二人は本当の友達になっていた。しかし結局、藻屑は殺されてしまう。

これはネタバレではない。本書の目次を捲って一番はじめ、「新聞記事より抜粋」と題されたその頁には、海野藻屑という少女のバラバラ遺体が発見された状況が淡々と記されている。次の頁では何事もなかったかのように第一章が幕を開け、舞台は藻屑の転校初日の教室へ。つまり、読者は最初に最も凄惨な結末を突きつけられるというわけだ。そしてこれにより、圧倒的な絶望の先にある、本当の意味での結末を知ることができるのだ。

読みはじめたばかりの読者は、藻屑がどこの誰なのかも知らない。「なんだこいつ」というごく一般的な第一印象、そしてどうしてこんな子が殺されるのだろうかという疑問や興味。しかし徐々に明かされる藻屑の秘密を目にしていくうちに、私たちもなぎさと同じように藻屑に愛着を抱くようになる。そうして読者にとってもう藻屑が「知らない女の子」ではなくなるとき、私たちは「藻屑、死なないで」と願ってしまっていることに気づく。だがその願いが叶うことはないことを私たち読者は知っている。そのもどかしさが、藻屑をどうにか救おうと藻掻くなぎさにリンクする。藻屑がついに殺されてしまったとき、それは冒頭の新聞記事と事実は同じでも、もはや全く別物なのだ。

「子供は無力で、生き残った子供だけが大人になる」というのがこの物語の大きなテーマだ。藻

屑のように幼い無力さゆえに生き残れなかった子供は、世界中に数え切れないほど存在する(存在していた)。ニュースで連日報道される名前さえ、時間とともに忘れてしまう。忘れ去られた子供たちも、人知れず死んでいった子供たちも、みな藻屑のように必死に戦っていたのだ。この小説を読み終えたとき、読者はそんな小さな兵士たちに思いを馳せることだろう。無機質な新聞記事という体裁をとる冒頭が、このテーマをより際立たせているのは言うまでもない。

しかしここで忘れてはいけないのが、生き残れなかった藻屑に対し、生き残った存在である大人たちだ。多くの大人たちが藻屑を救おうと奔走したが、それは間に合わなかった。そのひとりである担任教師の台詞を引用する。「俺は大人になって、教師になって、スーパーマンになったつもりだったから。(中略)ヒーローは必ず危機に間に合う。そういうふうになってる。けどどちがった。生徒が死ぬなんて。」非常に印象的な台詞である。子供は無力だが、大人がみなヒーローになれるわけではない。しかしここには単なる絶望ではなく、希望も込められているのである。それは、子供だけでは勝てない戦いでも、手を差し伸べてくれる大人がいるということだ。今回は間に合わなかったが、それでも救える命は必ず存在する。

そして何よりも重要なのがなぎさの存在だ。彼女は実弾にこだわるのが無意味だと気づき、藻屑の死を抱えながら、生き残った子供としての「大人」になることを決意する。藻屑はひとりの人間の人生を変えたのであり、なぎさの存在そのものが藻屑が生きた証になるのである。なぎさがいつか大人になって、小さな兵士に手を差し伸べている姿を思い描きながら、読者はこの本をそっと閉じるのだ。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 西 慧

世の中をどこか冷めた目でみる主人公。そんな主人公のもとに、ある日、風変わりな転校生がやってくる。転校生の奇抜な言動に振り回され、初めは疎ましく思う主人公だが、次第に相手を理解し、心を開いていく…。一見、よくあるストーリーだが、本作品がこの種の作品群と一線を画するのは、その転校生が殺害され、しかもその事実が物語の冒頭で述べられるという点だろう。読者は悲劇的な結末に向かって、為す術なくページを進めることになる。

この個性的な作品を、評者は的確な表現と巧みな文章構成でまとめ、その特徴を見事に捉えている。とりわけ中盤で話の流れを転換させることで、読者の関心を引き、作品のもつオリジナリティを強烈に印象付けている。登場人物や物語のあらすじの本質には触れず、客観的な目線から要点のみ伝える文体も、作品への興味や想像を上手く掻き立てている。事実、今回の応募作品の中で、作品を手に取りたいと感じたのは、私はこの書評が一番だった。

この作品から読み取るメッセージは人それぞれだろう。評者の「子供だけでは勝てない戦いでも、手を差し伸べてくれる大人がいる」という希望の一方で、主人公の兄が語る“ストックホルム症候群”の存在もまた、理不尽な現実に対して、筆者が伝えたかったメッセージであるように思う。そのような視点から作品を捉え考察を行うと、また一味違った書評になるだろう。これからもその文章表現に磨きをかけ、作品の面白さを伝えていてもらいたい。

入賞者から一言



大好きな本の魅力が伝わるように真剣に書いた文章なので、それが評価されてとても嬉しいです。初めてこうした講評を受けたことで自信もつき、これから文章を書くことがより楽しくなりそうです。今回の機会をくださった中西先生と選考に携わってくださった方々に感謝したいです。

第16回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

文化学部 2年次生

ひらい ゆうこ
平井 由芙子



書名：『影をなくした男』

著者：シャミツソー作；池内紀訳

出版社・出版年：岩波書店，1985

「影を持つ私たち」

人は生きていくなかでさまざまなものを得る。そのなかでも影は生まれながらにして持っているものだ。人間は皆、誰しもが影を持っている。人間だけではない。他の生き物もそれから無機物でさえ、等しく影を持つ。影はこの世にあるものすべてに平等で普遍的存在なのだ。シャミツソー作『影をなくした男』は、そんな影をなくしたことから始まるある男の数奇な人生を描いた物語である。

主人公のペーター・シュミレールは貧乏な青年で、あるとき灰色の服を着た不思議な男と出会う。男に取引を持ち掛けられ、シュミレールは自身の影と引き換えに無限に金貨が出てくる小袋を手に入れる。大金を得たシュミレールは貧しさから解放され、何もかも手にしたように見えた。しかし、人々は影のないシュミレールを気味悪がり、軽蔑の眼差しを向け、彼を遠ざける。シュミレールは影のないことを隠して生活を始めざるを得なくなった。そんななか彼は一人の女性と恋に落ちる。愛する人と結婚するために彼は心から影を求め、灰色の服を着た男を見つけることができない。絶望する彼の前に例の男が現れ、新たな取引を持ちかける。影を返す代わりに死後の魂を差し出せというのだ。シュミレールの弱みを知る男は、契約書に血でサインをするよう促す。男の正体は悪魔だったのだ。軽率に影を渡したことを後悔し、悪魔に対して嫌悪と憎悪を抱くシュミレールは泣きながら取引を断る。そうしてシュミレールは影だけでなく、最愛の人との結婚も失ってしまう。

影がない。そのことが大金を手にしたはずの主人公を苦しめる。影がないことがそんなに重要なのかと疑問に思う人も少なくないだろう。影なんてあってもなくてもあまり変わらない、むしろ大金を得られてラッキーなのではないか。そのように考える読者も多いだろうし、主人公もそう考えて影を交換したはずだ。そんな主人公と私たちの影に対する認識はその後の主人公への人々の冷たい態度で一蹴される。影のない主人公に向けられる数々の言葉は私たちの影に対する価値観を揺るがす。「この世の中では功績や徳よりもお金が幅をきかせているとしても、そのお金より影のほうがなおのこと、なくてはならないものらしいのです」この主人公の言葉が、作中における影の価値観をそのまま表している。

『影をなくした男』は原文がドイツ語で書かれているが、作者シャミツソーはもともとフランス出身である。幼いときにフランス革命のためにドイツへ亡命し、ナポレオン戦争ではドイツ側として母国フランスと戦った。戦後、一旦はフランスに戻ったものの、ドイツとフランスを行き来する生活を送り、やがて再びドイツに定住する。このような作者の伝記的背景から、影はフランスとドイツの二つ

の国で揺れ動くシャミツソーのアイデンティティを表していると考えられる。作者は影をなくす物語でアイデンティティの喪失を書いているのだ。多くの人々は自身が何者であるかというアイデンティティを祖国や民族といった帰属意識から見出そうとする。影とはまさに帰属する文化によって創り出される人の陰影なのだ。だが作者にはそれが難しい。影を探してさまよい歩く主人公の姿は、自身のアイデンティティを探し求める作者の姿と重なる。そして主人公に対する世間からの冷たい仕打ちはドイツでもフランスでも周囲から自国民と見られない作者の経験を反映しているように見える。

しかし裏を返せば、社会に組み込まれることを拒んで生きる場合には影は何の意味も持たない。シュミレールは悪魔に魂を売り渡して影を得るより、その世界から自由であることを選んだ。影がないことを主人公が恐れるとき、そこにはいつも他者があり社会があるが、物語の終盤、すべてを失ったシュミレールは一人で旅に出る。旅の途中で一歩歩けばたちまち七里をいくという魔法の靴を手に入れ、彼は感謝の涙を溢す。そして人間社会から疎外された彼は自然とともに生きていく。もう彼が影のないことを気にすることはなかった。彼は本当の意味で自由になったのだ。だが、彼は最後にこう述べる。「友よ、君は人間社会に生きている。だからまず影をたつとんでください」この言葉に読者は一気に現実を引き戻される。社会に翻弄されたシャミツソーは、ここで影を持つことの意味を改めて読者に問う。私たちは人間社会に属して生きるしかない。一度捨てた影は容易には取り戻せない。一方で、社会の価値観は普遍ではなく、覚悟を持ってそこから自由になる選択肢もあることを。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 渡邊 泰彦

翻訳家だけではなく、エッセイストとしても著名であった池内紀氏の端正な訳による本書は、書評を書く意欲をかき立てる一方で、原著者シャミツソーと本書の来歴から軽妙に解きほぐす解説が書評のガイドともなり、超えがたい壁ともなる。

だが、この書評は、本書のテーマである「影」に焦点を絞り、本文と解説を出発点にして自分の考えを示している。影を「帰属する文化によって作り出される人の陰影」と評するのは的確であり、納得させられる。失礼ながら、池内氏からの引用ではないかと本書の解説を見直した。

前半を支配する悪魔との関係から主人公が解き放たれ、別の物語ともいえる後半部分から「自由」というテーマを引き出し、前半と対比させている。主人公は、魔法の靴を、悪魔との取引ではなく、自ら店で買っていた。博物学の世紀を体現する本書の後半は饒舌で、時代の限界を示していると感じたが、むしろ、評者が指摘する自由を得た喜びを表しているのだろう。

入賞者から一言

このような賞をいただけて大変嬉しく思います。書評を通して、一冊の本とより深く向き合うという体験ができました。これからもたくさんのお本を読み、文学の面白さ、文章を書く楽しさに触れていきたいです。

最後に、ゼミでご指導くださった中西先生には感謝しております。ありがとうございました。



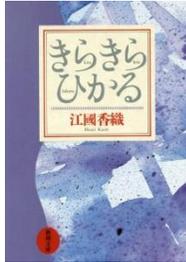
第 16 回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

文化学部 2 年次生

まつい あかり
松井 茜里



書名：『きらきらひかる』

著者：江國香織

出版社・出版年：新潮社，1994

「『きらきらひかる』と現在のLGBTQ」

ここ数年でLGBTQ(レズビアン, ゲイ, 両性愛, トランスジェンダー, クエストジョニングの頭文字をとった性的少数者を指す言葉)やジェンダーという言葉はしばしばメディアに取り上げられるようになり, 性の多様性を認める動きが日本中で広まりつつある。江國香織の代表作『きらきらひかる』の主な登場人物はアルコール依存症の妻にゲイの夫, そして夫の彼氏だ。この設定から現代の社会問題を描いた作品のようにも思われるが, 書かれたのは今から 30 年前の 1991 年である。

まず物語のあらすじを紹介したい。妻・笑子と医者 of 夫・睦月は両親の熱心な勧めで見合いの末 10 日前に結婚したが, 互いの両親に隠していることがあった。笑子はアルコール依存症で情緒不安定, 睦月はゲイで紺という恋人がいるのだ。「脛に傷持つ者同士」, 2 人はお互いの全てを受け入れ夫婦生活をスタートさせた。ある日, 笑子は思いつきで睦月の勤務先の病院に行き, そこで彼の友人の医者を知り合い, 週末に新居でパーティーを開くことになる。パーティーには紺も参加し, 睦月の心配をよそに笑子と紺は親交を深める。紺はパーティーを機にたびたび新居に現れるようになり, 3 人での居心地の良い生活が続いていくものと思われた。しかし, 結婚したら治まると言われた笑子の情緒不安定は, 次第に悪化する。周囲に子供を催促される婚姻関係という現実が笑子を蝕んだのだ。睦月もそんな笑子を見て, 次第に疲弊していく。自分たちの幸せを守るため, 笑子はある相談を産婦人科医に持ち掛け, 一方紺は旅に出るといって行方をくらませる。月日が経ち, 笑子と睦月のお見合い記念日に紺が帰ってくる。そして 3 人は, 再出発を祝うパーティーを始めるのだった。

この作品を読むと, 「愛」とは何かを考えさせられる。夫婦である笑子と睦月の間には肉体関係がない。しかし睦月のやさしさや笑子の無邪気さには恋人同士のような愛情が見られる。お互いに信用していて, 本当に大切に思っていることが伝わってくるのだ。睦月は笑子にいろいろなものを買ってくる。シナモン抜きのレーズンドーナツ, 安物のシャンパンをおいしくするシャンパンマドラ, モロゾフのシュークリーム。笑子が錯乱して物を散らかしても次の日には塵一つ残さずに片づけられている。笑子と睦月の間の愛と, 紺と睦月の愛ではなにが違うのだろうか。作者特有のディテールに満ちた文章は読者に, 本当の愛とは何か, 自らの価値観を省みるきっかけを与える。

本作は現代でも問題視されているいくつかの社会問題を内包している。主に, LGBTQ 当事者への差別的扱い, 当事者の結婚, 精神病, 親子関係, 人工授精などである。作中で睦月はゲイでありながら異性と結婚したこと, そして子供を作らないことを周囲の人間に責められる。現代でも自身のジェンダーについて, ひいては結婚, 子供について悩みを抱える人々が多い。いや, 顕在化し

たといった方が適切だろうか。本作が書かれた 1990 年代は今よりもっとセクシャルマイノリティへの視線は厳しかった。「ホモ」「おとこおんな」などの蔑称は日常的に面白おかしく使われ、まるで彼らはそう呼ばれて然るべく異常な人々であるかのように扱われた。この 30 年間でそのような呼び名に対する批判は高まり、性的少数者への偏見も徐々に取り払われつつある。しかし議員らが公で同性愛者に対し差別発言をしてたびたび問題になっているのを見ると、現代でも性的少数者が胸を張って生きられるような社会では決してないのは明らかだ。だからこそこの作品は現代の私たちの胸に刺さる作品なのである。

作者はあとがきで「ごく普通の恋愛を描こう」としてこの作品を書いたのだと述べる。笑子は自分たちの生活についてこのように言う。「どうしてこのままじゃいけないのかしら。このままでこんなに自然なのに。」物語が書かれた当時認められていなかった笑子や睦月の愛情のあり方は、現在でも「ごく普通の恋愛」として受容されているとは言い難い。だがつい先日、札幌地裁で同性婚を認めないのは違憲だという判決があったように、私たちは多様性を認める方向に動きつつある。LGBTQ を取り巻く諸問題が日々変化していく今だからこそ、この本を読む価値がきっとある。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 澤田 達也

本書評は 30 年前の作品に対する「書評」という形を取りながら、現代の最もホットな問題の一つである LGBTQ について、少ない字数の中で鋭い分析を行っており、読み手を引き込む内容となっている。書評としての構成も見事で、作品のテーマやあらすじについては第1～第2段落で簡潔にまとめられており、出来るだけ冗長にならないようにとの工夫が感じられる。第3段落以降では入賞者の感想や分析が詳述されるが、その内容も読みやすい。特に自身の主張を展開する第4段落は、接続詞の適切な選択もあいまって小気味良いリズム感が感じられる。

本書評も言及するように、LGBTQ への偏見や差別は現代においても決して払拭されているわけではない。「だからこそこの作品は現代の私たちの胸に刺さる作品なのである」とする入賞者の意見には大いに首肯できる。末尾で札幌地裁における判決の例をあげ、今後への希望について触れている点も「上手い」と感じた。

入賞者から一言

今回このような賞をいただけたこと、大変光栄に思います。本書評を通じて審査委員の皆さんに何か感じ取って頂けたのかなと嬉しく感じています。家族、先生、友人など恵まれた環境に感謝しつつ、今後はより一層読書に勤しみ自己陶冶に励みたいと思います。この度は本当にありがとうございました。



第 16 回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

現代社会学部 2 年次生

く が こうせい
久我 幸生



書名：『愛するということ』

著者：エーリッヒ・フロム [著]；鈴木晶訳

出版社・出版年：紀伊国屋書店，1991

「愛するということ」

誰もが孤独を感じたことがあるだろう。コロナ禍において一層孤独を感じる人が多いのではないだろうか。外出自粛で友達と会えない。キャンパスに行けないから友達ができない。孤独を緩衝するために SNS を開いて誰かと繋がり「自分は一人じゃない」と無意識的に暗示をかける。こんな日々を過ごして将来私はなにになるのか。不安で押しつぶされそうになっている人は多くいるだろう。

本書では、愛を通して現代社会における人の本質にとことん向き合っている。今日において現代人の「愛」に対する概念は、ロマンティック・ラブのように特定の相手に「落ちる」という感覚が広く浸透している。具体的に言うと、「一目惚れ」のように自然発生し、それがあたかも運命であったように錯覚してしまう感覚だ。多くの人が「落ちる」経験をしたことがあるだろう。しかし、フロムは安易な恋愛指南書のような、異性に「落ちる」技術を愛の技術だと論じていない。愛は習練可能な技術であり、愛こそが現代の社会生活の中でより幸福に生きるための最高の技術であると論じている。

フロムは、1900 年生まれのユダヤ系ドイツ人研究者である。専攻研究は社会心理学、精神分析、哲学であり、多様な観点から愛を捉えている点が興味深い。本書の発売から 60 年以上たった今でもフロムの愛の理論は現代社会に通用するであろう。なぜなら、当時よりも資本主義の様相は進んでおり、人と人との関係はますます希薄になり、権力や地位、金が最も重要なものだと勘違いし、孤独を感じることが多い世の中に変化してしまったからだ。本書を通して愛の技術を習練する事で人の本質を理解でき人生の指針となるような価値観の答えが見つかるだろう。何度も言うが、本書は浅はかな恋愛指南書ではない。

「愛は技術だ」と聞いて、愛について学ぶことなどないと思いつく人は多くいるだろう。しかし、それは大きな間違いだ。本書の中では、愛についてなにも学ぶことはないという誤解について丁寧に説明されている。その中でも恋に「落ちる」と言う頭に血がのぼった状態、互いに夢中になった状態を愛していると勘違いしてしまっている理論に共感を持った。それまで赤の他人同士だった二人が互いを隔てていた壁を突然取り払い、一体感を覚える瞬間は心が躍り、胸が高鳴る瞬間になるだろう。その瞬間を勘違いして「愛」と呼ぶ者は少なくないはずだ。しかし、このような状態はいかに今まで自分が孤独であったかを示しており、「与えられる」ことに一時的に満足しているに過ぎない。しかし、「与えられる」ことは長続きせず、失敗に終わることが多い。本来なら失敗をすればその原因を学びたいと思うし、次に活かしたいと思う。そのために愛を知り、どうすれば愛

することができるようになるかを能動的に学ばなければならない。愛することは努力と知識が必要であり、外的要因から成立する浅はかな営みではない。

本書では、四段構成で愛について論じている。まず、第一に「愛は技術か」について論じられている。この章では愛についての問題提起がなされている。第二に「愛の理論」について論じられている。この章では、愛の対象や愛の多様なあり方を説明しており、愛とは単に「胸が高鳴ること」ではないと暗黙裡に説明されている。第三に「現代西洋社会における愛の崩壊」について論じられている。多くの欲望がある中で愛を持って行動することの意義や現代西洋における愛の欠落について説かれている。第四に、「愛の習練」について論じられている。愛はどのような概念でどのような価値観を要するのか。そしてどのようにして愛の技術を養っていくのかについて言及されている。この四段構成で愛について深く掘り下げ愛の意義について論じられている。

本書は、「愛」という誰もが一度は触れたことがある普遍的な問題に対して高尚に論じている。誰もが一度は「愛」について触れたことがあるため、共感できる点が多いだろう。それゆえにいつの間にか本書と対話しながら問いを立てて自問自答していることに気がつくだろう。愛を通して自分と向き合い、人としての本質を考え抜くことが孤独から抜けだし自立していく第一歩になるのではないか。その過程の一助となりうる本書をぜひ一読していただきたい。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 澤田 達也

入賞者も書評の中で記しているように、2年近くにわたる「コロナ禍」の中で孤独を感じる人は多いだろう。特に大学生にとって、4年間の学生生活に占める2年という時間は決して短くはない。入賞者が「愛」を論じる本書を読もうとしたきっかけもコロナ禍における孤独な不安感が起因であったのだろう。

「愛というものは、その人の成熟の度合いに関わりなく誰もが簡単に浸れるような感情ではない」(p5「はしがき」)とあるように、本書は一種ドライに「愛は技術である」と説く。それに対して入賞者はやや戸惑いを感じながらも、何とか理解、咀嚼しようともがいているように、この書評からは感じられた。文中に「自問自答」という表現が出てくるが、それこそが読書の醍醐味でもあるかと思う。これからも様々な本を通じて自問自答を続けてほしい。

入賞者から一言

この度、図書館書評大賞『佳作』を頂くことができ、大変光栄です。次年度は大賞を受賞できるようにたくさんの文学に触れて自分の知見・経験を広げていきたいと思っております。学部の授業にも精進して参ります。



第 16 回 京都産業大学図書館書評大賞

文化学部 2 年次生



佳作

こいで そうた
小出 奏太



書名：『一投に賭ける』
：溝口和洋、最後の無頼派アスリート』

著者：上原善広

出版社・出版年：KADOKAWA，2016

「リラックスなんかせえへんよ。」

日本人アスリートと聞けば誰を思い浮かべるだろうか。野球のイチロー選手、レスリングの吉田選手、スケートの羽生選手、それとも他の誰かか。いずれにせよこの質問を受けて本書の主人公である「溝口和洋」と答える人はおそらくいないであろう。しかし、本書を読み終えた後なら「溝口和洋」と答えるのではないだろうか。

『一投に賭ける』はノンフィクション作家の上原善広が、伝説のやり投げ選手である溝口和洋を執念の取材で描き切ったスポーツノンフィクションの傑作だ。87m60cm。

1989年に溝口が達成したこの記録は、約30年経った現在も破られていない日本記録だ。当時としては世界歴代二位の大記録でもあった。体格で西洋人に圧倒的に劣る日本人が、トレーニングなどの研究も進んでいなかったこの時代にこのような大記録を出したのは驚異的だという他ない。本書はその秘密に徹底的に迫る。

溝口和洋はなぜやり投げを始め、いかなる過程を経て世界を相手に勝負を挑み、今なお破られることのない大記録を打ち立て、どのように引退したのか。本書で語られる溝口の人生の中でも特に目を引くのは、彼が世界のトップになるまでに辿った過程だ。尋常ではない。トレーニングは基本的に「毎日」行う。それもほとんど狂気のようなウエイトトレーニングで、ベンチプレス 100kg を 1000 回。その後、腕の力が入らなくなるまで懸垂を行う。溝口曰く、「肉体の限界を超えたところに、本当の限界がある」「毎日火事場の馬鹿力を出せばよい」「火事で焼け死ぬと思ってやれば、できないことはない」。そんな練習をしていけば怪我でもしてしまいそうだが、彼曰く、「痛みは問題ではない」。ただし、彼は単なる根性論者ではない。従来のトレーニングの常識を疑い、自分の体と対話を重ね、理想的な動作を求めて緻密に探究を深める研ぎ澄まされた知性は、まるで学者のようだ。彼が自分なりの理論を確立していく描写は、スポーツに興味のない読者にも響くものがあるだろう。そうして独学で編み出した理論と超人的な練習量で実力を伸ばしていく。筋トレをしすぎると体が重くなり動きが硬くなってしまいそうなものだが、彼の投擲を You Tube で見てみると、実際には素人目にもわかるくらい驚くほど力みのない滑らかな動きをしている。また、周囲の人間や組織を顧みない彼の無頼な態度はなにかと軋轢をひきおこす。マスコミを嫌悪しており、気に入らない記者を見つけたときは追いかけて袋叩きにするなど、溝口に関する様々な逸話が残されている。今の時代なら許されない振る舞いではあるが、自分を曲げずに貫き通す姿は爽快ですらある。

オリンピックで金メダルを取るために鬼のようなトレーニングを自らに課した溝口であったが、その集大成となる1988年のソウルオリンピックで実力を全く出せずに予選敗退の惨敗を喫してしまう。このときはマスコミにも叩かれ、何より、間違いなく世界一練習を積んだのに結果を出せなかった自分が情けなく、「色々なことが頭をよぎった」という。落ち込み酒浸りの日々を送っていたが、それでも、「自分が甘かった。今まで応援してくれた人たちに示しがつかない」と再起。それまでの自分の投擲技術を洗いなす。オリンピックに至るまでの猛練習で疲れ切った体と心も徐々に回復し、1989年のワールドグランプリシリーズ(今でいうダイヤモンドリーグ)に参戦する。そして大会の初戦、アメリカのサンノゼで、日本陸上史に残る金字塔的日本記録を打ち立てた。「全てをこの一瞬に賭け、自分はその賭けに勝った」、溝口はそう言い切る。その後もヨーロッパを転戦し、世界の強豪たちとのしぎを削り、日本人として初めてワールドグランプリ総合2位を達成する。今後の活躍を期待された溝口だったが、それまでの壮絶な練習について体が悲鳴をあげる。練習中の右肩の怪我によって記録は低迷し、再び世界の一線で戦うことなく、1996年にひっそりと引退した。それでも彼は、「ただ一投に命を賭けたことがあり、その賭けにはおおむね勝つことができた」と自身の競技生活を振り返る。その競技人生を強烈に駆け抜けた男の言葉は、裏表がなく清々しい。

溝口が狂気のような試行錯誤の末にものにした一瞬の輝きは、普通の生き方をしている人間には掴むことのできない栄光だろう。決して勧められる生き方でも真似できる生き方でもない。それでも、彼の文字通り命を削って競技に挑む姿勢は凡夫をして奮い立たしめるものを持っており、「本気で生きるとはこういうことか」と心の底から実感させるだけの訴求力がある。彼が全身全霊を賭けて放ったやりは、読者の心の底に深く突き刺さるだろう。そして、その後の人生で、「いかに生きるべきか」という問いに直面したときに、一つの指針となるのではないだろうか。限界に挑む一人の日本人の生き様を肌で感じることで、鮮烈な読書体験を保証する。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 西 慧

本作品は、投擲（やり投げ）の世界で己の限界に挑み、数々の記録を打ち立てた溝口和洋氏を取材し書かれた、ノンフィクション作品である。生い立ちから、やり投げを始めるきっかけ、トレーニングや私生活、大会出場時の様子など、溝口氏自身が回顧する形で書かれおり、ノンフィクションというより自叙伝に近い。実は、本学の卒業生でもあり、作品には京産大でのトレーニングの様子が描かれている。

スポーツノンフィクションという、書評としては難しい題材ではあるが、評者自身の考察を挟みながらテンポよく文を連ねることで、読者は最後まで一気に読み通すことができる。また、一文一文が簡潔かつ明快な言葉で書かれており、起承転結もはっきりした構成であるため、内容が違和感なく入ってくる点も高く評価できる。評者の『「本気で生きることはこういうことか」と心の底から実感させる』もまさしく、本作品を読み終えた誰もが抱く思いであろう。

本書評では概して、人並み外れたトレーニングと大会での結果について述べられているが、作中ではやり投げに関する技術や持論はもちろん、勝つための緻密な戦略や無頼派としての一面（むき出しのライバル心や周囲との衝突など）が、実に飾り気のない言葉で描かれており、私のようにスポーツとの関わりが少ない者でも楽しめる作品となっている。この点にもう少しスポットライトを当て、書評に盛り込めると、作品の魅力がより多くの読者層に伝わるように思う。これからも多くの作品に触れ、その確かな文章力で魅力を伝えてほしい。

入賞者から一言



まさか入選しているとは思わずありがたき幸せです。溝口和洋さんについては多くの人に知ってほしい偉大すぎる人です(本学卒業生です)。実力というより題材がよかったから選ばれた感もありますが、これからも文章を書くことを何らかの形で続けていきたいです。

第 16 回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

現代社会学部 3 年次生

すどう たかひろ
須藤 崇太



書名：『お姫様とジェンダー』
：『アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』

著者：若桑みどり

出版社・出版年：筑摩書房，2003

「多様性の普遍的な問題」

最近、ダイバーシティという言葉をよく耳にする。ダイバーシティを訳すと多様性という意味だ。現代社会では価値観、宗教、働き方など様々な多様性が求められる。そのうちの一つにジェンダーがある。ジェンダーの問題は誰もが当事者として考えなければ進まない。それに対して私を含め一部の人はジェンダーの問題を理解する前に考えることをやめ、答えを出そうとする。私は多くの人がジェンダー問題の本質について理解したほうがよいと考えた。そのため本書をジェンダー学の入り口として紹介したい。

『お姫様とジェンダー』本書は 2001 年～2003 年にかけて著者である若桑みどりが川村学園女子大学で教えたジェンダー学の講義が基となっている。ジェンダー学の視点から『白雪姫』『シンデレラ』『眠り姫』など誰もが聞いたことがあるプリンセス・ストーリーを紐解いていく。話のあらすじを知らなくても軽く触れられているため、これらのアニメを観ていなくても楽しめる内容となっている。

第一章では、ジェンダーの基礎知識とジェンダーの問題を克服しようと様々な制度や法が整備されているがなぜ解決しないのか、について触れている。若桑は解決されない要因として「刷り込まれた意識」を挙げた。女性らしさ、男性らしさを社会から刷り込まれ囚われている。タテマエの上の平等を内面の「刷り込み」が凌駕してしまっているのだ。こうした刷り込みは家父長制社会が作り出した男性優位の世界が構築した。この様な刷り込みの後ろ盾の一つがシンデレラ・ストーリーである。

シンデレラ・ストーリーには女の子は自分で幸福をつかみ取る努力をせずに、人の言いつけを素直にきいていけば、誰かが幸せをもたらしてくれるといった流れがある。アメリカの女性作家コレット・ダウリングはこうした女性にありがちな他者に自身の幸福や方向をゆだねる心理傾向をシンデレラ・コンプレックスと呼んだ。こうしたシンデレラ・コンプレックスは多くの作品に現れている。

第二章以降、本題であるシンデレラ・ストーリーに入る。学生にアニメ映画を見せて感想を書いてもらったものが抜粋され載せられている。素直な感想から批判的な感想と幅広くあり新たな視点に驚かされてばかりだった。中でも印象的な感想がある。その感想は『シンデレラ』に対するものであり、タイトルは「シンデレラの下心」。シンデレラは性格の良いかわいそうな女の子だと言いながら、いじわるな姉妹と同じ王子を狙う下心のある女の子といった内容である。シンデレラは王子様

と結婚することによりいじめを受けるという状態を打破したうえ、社会的階級の上昇を狙っているということになる。ここに家父長制社会を見出すという夢のない指摘により私の中のシンデレラへの印象が変わってしまった。またある学生はタイトル「デカイ足」で、内容は「なぜ姉妹たちはあんなに足がでかいのだ?!」。この感想は笑って終わらせることもできるが意外と核心をついている。次の学生の感想のタイトルが「王子様が愛したのは小さい足だったのです」。ストーリーの中で王子はシンデレラが残したガラスの靴をもとにシンデレラを家来に探させる。王子自身が行かずに家来に任せるといところがポイントだ。王子が好きなのは姉妹のように足の大きい女性ではなく、シンデレラのように足が小さい女性ではないかと言った指摘がされた。それは身体的特徴を求めているだけで内面は関係ないということになる。シンデレラ・ストーリーという全てが綺麗に見える魔法により誤魔化されているが、現実と同じくらい、いや現実より無情なストーリーである。

本書の学生達は初めのうちは映画を観た感想をそのまま書いていた。それは娯楽として映画館に見に行きお茶を片手に感想を友達と共有するくらいのものだ。だが講義が進むにつれ、鋭い指摘をする様になり若桑を驚かせる視野を手に入れる。私は学生達と何度も討論をした。顔を見たこともなければ世代も違い、話すことのできない学生達だが共に講義を受け討論したと思う。それほど本書の学生達に感化された。

学生の感想の前後に若桑の解説が入るのだが、時折ジェンダー学を女性に限定し、男性に対してのジェンダーバイアス(偏見)が見られる。こうした狭義のジェンダー学は偏りがある様に感じられるが、この本が出版されて約20年経っていることを忘れてはならない。こうした考えの違いからアナクロニズムの批判をするのではなく、当時のジェンダー問題を感じとって欲しい。当時は現代において過激とも感じるほどの急進的なジェンダー改革が必要だったのだ。若桑はジェンダー学を「ものの見方」の学というべきだと述べた。本書を通して得た「ものの見方」は現代社会と多様性の間にある普遍的な問題を見つけることに役立つだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 近藤 隆史

この書評の対象は、タイトルからも分かる通り、ジェンダーの社会的な問題を扱った作品で、そうしたことが、多くの人にとって身近で馴染み深い子供向けの童話の中にも見いだせることを読み解きながら、その重要性を考えさせられるものでした。書評では、そうした問題の提起から始まり、作品の作者がジェンダーをどう捉えているのか、いくつかの興味深いエピソードを交え解説してくれています。思いもよらないものの見方に感心させられます。少なくとも私が子供の頃に読み聞かされたときには、そこまでの発想には到底及びませんでした。さらに、書評の中では、安易に偏見などとして批判するのではなく、この作品が生み出された時代背景をしっかりと踏まえ、むしろ、当時の社会問題の捉え方に関心を寄せることが大切であるとし、この作品に限らず、読んで批評する際には、意識しておきたい読み手の姿勢の一つであることに気が付かされました。

入賞者から一言

この度は佳作に選出していただきありがとうございます。これまで本から感じたことを言語化することにより、本への印象が変わってしまうのではないかと考えていました。今回の書評大賞を通して新たな楽しみ方を見つけられ嬉しく思います。また、私の書評から「お姫様とジェンダー」に興味をお持ちいただければ幸いです。



第 16 回 京都産業大学図書館書評大賞

経済学部 3 年次生



佳作

たにおか いさむ
谷岡 武



書名：『トツカイ 不良債権特別回収部
：バブルの怪人を追いつめた男たち』

著者：清武英利

出版社・出版年：講談社，2019

「誰が悪いのか」

将棋には持ち駒という取った相手の駒を自分のものとして使うことが出来るルールがある。また、有利に事を進めるために弱い駒を差し出す捨て駒という戦術がある。この本において捨て駒としての持ち駒という意味で「奪り駒」という言葉が使われている。この本はそんな「奪り駒」と表現される人々の活躍を描いたノンフィクション作品である。

『トツカイ 不良債権特別回収部』の著者は清武英利である。彼は読売巨人軍の球団代表やゼネラルマネージャーを歴任した。現在はジャーナリストとしての経験を活かしてノンフィクション作家として活動している。この作品は整理回収機構とその前身の住宅金融債権管理機構で働いた人々の物語である。登場人物は原則として実名が掲載されており著者は直接関係者に取材しているため真に迫った内容となっている。

この物語の主な登場人物は国策会社である整理回収機構の東京と大阪に存在した焦げ付き 100 億円以上の大口、悪質、反社会的な債務者を担当する特別回収部、通称「トツカイ」と呼ばれる部署にいた職員たちである。その職員たちの多くは住宅金融を専門に行う 7 つの住専とその設立母体の金融機関に勤めていた。1980 年代のいわゆるバブル期に、銀行が個人向け住宅ローン市場に力を入れ始めると、住宅金融を専門に行っていた住専は融資先を求めて事業所向け不動産事業に注力し始めた。例えば、住専各社は末野謙一が設立した末野興産にはピーク時に 1 兆円の、それまでの常識では考えられない多額の融資を行い、西山正彦の設立したペキシムに 286 億円の融資を行っていた。言うまでもないが、1 社に集中した融資は、貸し手にとって大きなリスクを孕んでいる。

物語の序盤は融資先を求める住専の状況を利用して、母体の金融機関が直接的には融資したくない暴力団がらみなどの融資先を紹介したことで住専に不良債権が溜まり、それが原因で破綻していく様子や、先述の大口で悪質な債務者である末野謙一や西山正彦などへ行った融資が不良債権に変貌していく様子が生々しく描かれている。こうして膨らんだ不良債権が、住専やその母体の金融機関を破綻へと追い込み、国の主導で不良債権問題に対処するしかない状況が描き出される。国は、金融システムの破綻を避けるため国民の税金から捻出した公的資金を投入した。その後、「回収可能と判断された債権」を回収する住宅金融債権管理機構や整理回収銀行を設立し不良債権を引き受けさせた。ここから現在まで続く国策会社の整理回収機構の戦いが始まっていく。

中盤では弁護士の中坊公平率いる国策会社の整理回収機構の活動の様子を描いている。中坊公平社長時代は強硬的な債権回収を押し進め、暴力団がらみの債権や中小企業の債権、海外の債権の回収を行っている。海外の不良債権となった融資先には大統領になるずっと前のドナルド・トランプの会社も含まれている。中坊公平は中小企業に対する強引な債権回収姿勢や後に発覚する破綻した朝日住建の資産回収の際にはほかの債権者の抵当権を抹消させるなどして 15 億円を詐取したとして告発され失脚する。国の付託を受けた整理回収機構の回収姿勢や朝日住建の資産回収に対するほかの債権者の消極性を知ると本当に非難を受けるべきだったのか疑問を抱く。また、中坊公平率いる整理回収機構の使命感に応える法制度の準備を行わなかった国には矛盾を感じる。その後、整理回収機構は方針転換を余儀なくされ活動を続けていくが世間から忘れ去られることになる。

この作品を読み終えると悪質な債務者との戦いが多く描かれており悪質な債務者だけが悪かったという印象を受けてしまうだろう。しかし、この不良債権問題の発生原因として住専の無秩序な融資や金融機関の無責任な融資先の紹介、政府の見通しの甘い政策がしっかりと書かれていたことを忘れてはならない。筆者は整理回収機構の戦いは現在も続いており整理回収機構が発足当時から返済を求め続ける不良債権が存在し、その穴埋めに税金が使われたことを国民が知るべきであると考えている。

この作品は住専の緩慢な経営や、かつての大蔵省の甘い行政指導、税金の投入などに怒りを覚えた国民が時を経て怒りどころか問題そのものを忘れてしまったことへの著者からの警告とも考えられる。過去のものとして扱われるバブル経済・バブル崩壊が、現在の経済にもたらす影響を知り、現在の状況を漫然と受け入れずその背景にあるものを考えることと社会問題に対する国民の関心の重要性を筆者は伝えたいのかもしれない。本書を読み進めるには、ある程度の下調べを要するが、自らが社会を動かす一員であることに責任を感じるには十分な作品となっている。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 渡邊 泰彦

1950 年生まれの著者は 40 歳代で、2000 年前後の生まれの評者は生まれる前の出来事として、私は 20 歳代で、本書に登場する事件をみている。また、評者は経済学部の学生として、私は法学部の教員として、本書を読んでいる。このような世代、学問分野の違いをふまえつつ、本書と書評を興味深く読んだ。

この書評の多くの部分が要約にあてられ、本書の流れをコンパクトにつかむことができる。欲を言えば、評者が本書からどのようなことを知り、どのような考えを持つに至ったのか、もう少し知りたい気もする。奪り駒と呼ぶ人々とのインタビューをとおして金融機関や政府を批判しながらも、かつてはバブル経済を謳歌していたであろう本書の著者とは違う視点かもしれない。

本書に登場する悪質な債務者 N 氏の自宅は岩倉にあり、取り壊し後も権利関係の複雑さから空き地として長年放置されていた。今や高級住宅街となった一画から、評者は何を見るのだろうか。

入賞者から一言

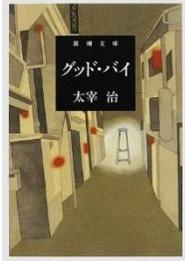
この作品は不良債権やその回収にまつわるノンフィクション小説で、内容を理解するためには金融の知識が必要でした。時系列を揃える形で細断された文章を自分で組み直しながら熟読すると“バブル時代に起きていたこと”への理解が進み、中立的な視点で書評に取り組むことができました。今回の熟読した体験は、私にとって新鮮なものでした。今後も充実感のある読書を心がけたいと思います。





佳作

つかもと ゆうま
塚本 侑聖



書名：「メリイクリスマス」

(『グッド・バイ』収録)

著者：太宰治

出版社・出版年：新潮社，1972

「自己の曖昧さ」

心と思い出を遡ってみると、当時は苦々しく思っていたことでも案外悪くなかったかなと思直すことがある。その逆に、夢中になっていたことでも、今考えると何が面白かったのか分からないということもある。そんなとき、過去の自分と現在の自分がまるで別物であるかのように思われる。その分岐点を探してみても曖昧で、明確な答えは見つからない。

太宰治の『メリイクリスマス』に登場する主人公は疎開先の津軽から 1 年 3 ヶ月ぶりに東京に帰ってきたのだが、以前と何も変わったところが無く小旅行から帰ってきたみたいだと語っている。12 月のはじめ、彼は数年前によく遊んでいた女の娘であるシズエ子と偶然出会った。二人はシズエ子が母と住んでいるというアパートに向かうが、シズエ子はあまり元気が無い様子である。話をよく聞くと、シズエ子の母は広島空襲で死んだというのである。シズエ子の様子を母への嫉妬か、自分への恋心によるものだろうと考えていた主人公は「甘い事も平気で言えるようでなくっちゃ、若い人の恋人にはなれない。」と語っていたが、思い違いだと知ってひどく落ち込む。

二人は部屋には入らずそのまま引き返してうなぎ屋の屋台の、のれんをくぐって小串と酒を三人前注文する。一つはうなぎが好きだったシズエ子の母の分である。二人が一言も言葉を交わさず黙々と飲んでいると、屋台の奥でセンスの無い冗談を言って騒いでいた紳士が突然、外を歩いていたアメリカ兵に向かって「ハロー、メリイ、クリスマス。」と叫んだ。主人公はその諧ぎゃくには噴き出して、改めて「東京は相変わらず。以前と少しも変わらない。」と語るのだ。読者はこの小説を途中までは恋愛小説として読むかもしれない。しかし最後まで読むと戦後の東京を描いた風俗小説として捉えることも出来る。どちらにせよ共通しているのは文章全体にかなしくて、どこか冷めたような雰囲気が流れているということである。

この小説の主人公は、明記はされていないが太宰治を連想させる。この作品自体、筆者が疎開した津軽から 1 年 3 ヶ月ぶりに上京して書いた第一作である。では太宰治が主張したかったことは何か。まず『メリイクリスマス』が発表された昭和 22 年は終戦から間もない時期であり筆者にとっても大きな影響を与えたはずである。また彼は無頼派の作家としても有名である。無頼派とは終戦直後に若い読者を中心として人気を博した一群の作家たちの事で、反逆精神や自己への厳しい批判などが特徴とされている。『墮落論』で有名な坂口安吾らも無頼派として知られている。この思想は物語の中でも強く反映されている。主人公は紳士がアメリカ兵に「ハロー、メリイ、クリ

スマアス。」と叫んだのを見て、東京は以前と変わらないと言う。日本は戦争に負けて GHQ に統治されている訳で、本来敵であったアメリカ兵は忌み嫌う対象なはずだ。物語の中で主人公が田舎の或る人に書いた手紙として示される、「形而上の気質に於いて、この都会は相変わらずです。馬鹿は死ななきゃ、なおらないというような感じです。」という記述も示唆的だ。太宰はこの描写を通して、日本の迎合的な態度に対する批判や、日本人の矛盾を描き出して社会と闘おうとしている。彼の退廃的な思考は物語の世界に留まることは無く、読者の精神の奥底まで侵入し自己の主観的真実を問い質してくる。太宰自身も精神を病み自殺未遂を繰り返すなど身を滅ぼすほどの危うさを含んでいることは読者も認識しなければならない。

太宰治の文学の特徴は、物語の中に筆者の存在が強く浮かび上がってくるという事だろう。読点が多く一文一文を丁寧に置くような筆致は、読者に太宰本人が直接語りかけてくるような錯覚を起こさせる。他の小説家と比べて圧倒的に距離が近いのだ。物語を読み終わった後も「自己の曖昧さ」という問いが頭から離れない。ぜひ『メリクリスマス』を読んで自分の存在に思いを巡らせて欲しい。情報が多く飛び交う現代社会の中に於いて、自己の内面について深く思案する時間は貴重である。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 近藤 隆史

太宰治の作品は、決して読書好きでない私も学生のときにいくつか読んだことはあります。『グッド・バイ』や『眉山』は、語りかけ口調の大変読みやすく、テンポのいいストーリーで、テレビドラマの一コマを見ているかのような印象をもち、個人的な印象としては、文豪の作品として鑑賞したというよりも、率直におもしろかったという記憶だけが残っています。この書評の対象の作品『メリクリスマス』も、主人公が自らの思い出の女性とその偶然であった娘(シズエ子)に対して、思いを馳せるシーンが絶妙で面白く、文学作品であることを忘れさせ、つついそうしたドラマ仕立ての場面に意識が引き寄せられてしまいます。この作品は短編であって、かえって書評を書くのは難しいかと思いました。この書評からは、登場人物の僅かな会話などから、この作品から読み取れる戦後間もない日本の社会に対峙する作者のメッセージにも気付かされ、改めて読み返してみるとその作品のまた違う楽しみ方をさせてもらえました。

入賞者から一言

この度、選出いただきありがとうございます。書評の執筆は、自分の思考と語彙の未熟さを実感する苦しい作業でした。しかし、拙い言葉であっても言語化することで主張が形をもって他者に伝達されるのだと思います。今後もより良い文章が書けるように精進します。



第16回 京都産業大学図書館書評大賞 アンケートと統計



アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 大学の授業・ゼミの一環として。
- 大学が主催している取り組みに少しでも参加しようと思ったから。
- 卒業論文を書くにあたり、他人へ分かりやすく本作の魅力を説明するのが有用であると考えたから。
- 文章を書くスキルは将来必要になってくるから。
- 書評大賞講演会で磯田道史先生の講演を聞き、書評に興味を持ったから。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- 1. 興味のある分野だから 43人
- 2. 先生からの推薦・指示 21人
- 3. 図書館でみつけたから 6人
- 4. 話題の本だから 6人
- 5. 好きな作家だから 16人
- 6. その他 16人

Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(68人)(理由)

- 文章力を向上させたいから。
- 本を読むだけでなく、書評として文章化することで、視野が広がり新たな考えをすることができたから。
- 書き終わった後の達成感があったため。
- 書評を書くにあたって普段以上に本を読みこむため、思い入れのある1冊になったと思うから。

「いいえ。」(37人)(理由)

- 書評を書く難しさを知ったから。
- 就活で忙しいと思われるから。
- 本年度で卒業するため。
- 本は読めたらいい。とても良い本を読んだ場合でも、書評を書いてまで人に薦めたいとは思わないから。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- 書評の途中であらすじを書いていると、ついついネタバレまで書きたくなくなってしまった。一番良かったところを書くとネタバレになってしまうので、書けないのはもどかしかった。
- 読書感想文とは違い、いかにして他人の興味を惹ける文章を書くか、を念頭においた。書評を書くことは今回が初めての経験だったのでそこが一番苦労した。
- 京都産業大学図書館に所蔵のない作品でも応募できたことは、非常に嬉しく思った。
- 気まぐれで始めたことではありましたが、挑戦して良かったです！時間があればぜひ次回も挑戦したいなと思いました。
- 提出時、ファイルが正確に上げられているか不安だった。

Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 小説の執筆についての話を聞いてみたいと思った。
- 講演会があることを認知している学生が少ないと感じるので、もう少しPRしてもいいのではないかと思った。

- 希望する講演会講師（敬称略・五十音順） -

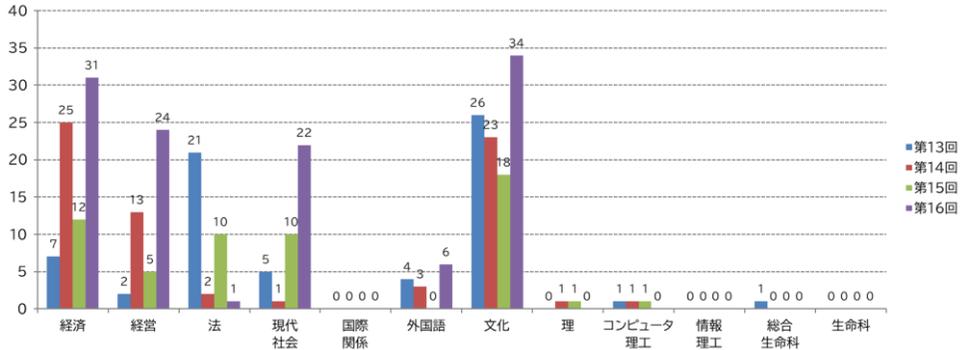
浅田次郎 浅葉なつ 有川浩 岡崎琢磨 菊地成孔 原田マハ はらだみずき
万城目学 道尾秀介 宮本輝 森見登美彦 米澤穂信 書店や出版社の社員の方



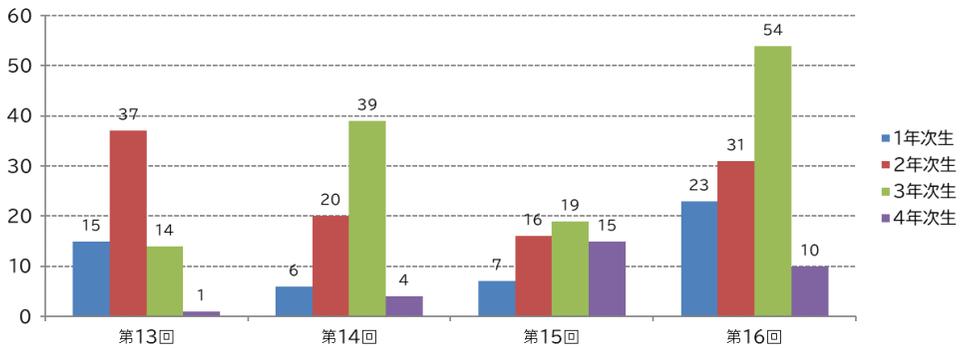


統計はこちらです。

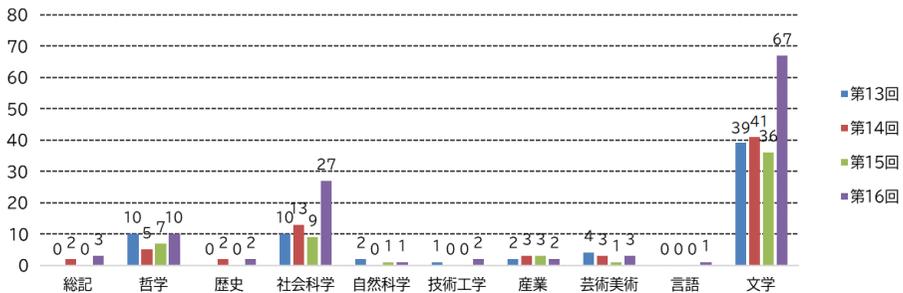
学部別応募者数



学年別応募者数



対象図書の分野別冊数



書評大賞には 117 名から 118 篇の応募がありました。学部別応募者数は文化学部・経済学部・経営学部・現代社会学部の順となりました。文系学部からの応募は法学部・国際関係学部を除いて前回より増加した一方で、理系学部学生からの応募がありませんでした。自らの読解力、文章作成力を向上させる機会として、積極的な応募をお待ちしています。

学年別応募者数は、例年通り全体に占める2年次生・3年次生の割合が多い傾向にあり、今回は応募数全体の増加にあわせて、1～3年次生の増加が顕著にみられました。継続的に応募することで身につく読解力・表現力の向上は、卒業後においても役立つと考えますので、今回だけでなく次回以降もぜひご参加ください。

対象図書の分野別冊数では、例年同様文学及び社会科学の図書が多いですが、少数ながら自然科学・技術工学・言語の図書を対象とされた書評も応募された結果、すべての分野から書評が執筆されることになりました。興味のある分野、自らの学部の専門分野、普段はあまり手に取る機会の少ない分野など、この書評大賞をきっかけに本を読む習慣を身に着け、様々な知識を会得してもらえればと考えています。



図書館書評大賞講演会

私の読書と書評ぐらし

国際日本文化研究センター 教授

磯田 道史氏

第 2 回 新潮ドキュメント賞受賞

第 63 回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞

第 10 回 伊丹十三賞受賞



2021年6月7日、図書館書評大賞講演会が開催された。講師は、映画化もされた『武士の家計簿：「加賀藩御算用者」の幕末維新』をはじめ、『殿様の通信簿』『無私の日本人』など、多くの著作をもつ国際日本文化研究センター教授の磯田道史氏。コロナ禍のなか、初めてオンラインでの開催となったが、400人を超える聴衆が集まった。「私の読書と書評ぐらし」をテーマに、歴史・読書・書評について、お話をうかがった。

■本は時空を飛び越える！

磯田氏の講演は、自身が歴史に興味をもったきっかけから、スタートした。

ご出身は、岡山県岡山市。弥生時代の集落遺跡・津島遺跡が広がる土地で、少年時代の磯田氏は、おじさんに弥生時代の土器が見つかったと声をかけられる。発見された土器の破片を見て、「この土でできているはず」「復元してみよう」と考えた。2・3カ月奮闘してみたが、うまく復元することができない。

そのため今まであまり縁がなかった図書館へ足を運び、焼き物や土器の本を読み込むことで、土器を復元することができた。表面の赤色を再現するためには、錆を集めて土に混ぜ、釉薬として土器の表面に塗り、乾かし、それから焼く、という工程が必要だったのだ。

土器が発明されてから釉薬を使うようになるまで、何千年もの時間がかかっているが、本を読むと、1日で知ることができる。本による知識が、いかに「生きていくうえで大事か」を考えた。

■本の虫になった少年時代

そこからは、本に夢中になりすぎて授業に戻らず、先生から連絡帳に書かれるような少年時代を過ごした。

戻らなかった理由を問われると「いいシーンだったんですよ」と答えるような「変わった子供」だった。ただ、読んでわかる本とわからない本があった。『東海道中膝栗毛』『源平盛衰記』『義経記』はわかるが、『源氏物語』はわからない。社会経験や恋愛経験がないとわからない本と、そうでない本があると知った。

自身の読書方法を、“受験には向かない”と実感することもあった。授業で夏目漱石がでてきたら『夏目漱石全集』を全巻開き、作品や書簡に触れる自分に比べて、用語集で必要な部分だけを覚える人の方が受験に有利だった。

京都府立大学に進学し、図書館の本を全部開ける、あるいはせめて背表紙にはさわる、という一人プロジェクトを行った。その後、たまたま入った岡山大学図書館で一冊の本と出会う。『近世農村の歴史人口学的研究：信州諏訪地方の宗門改帳分析』、著者は速水融氏。この先生がいる大学に行ってみようと考え、慶應義塾大学に移ることにした。

図書館に通いつめ、寝食を忘れて読書に没頭し、倒れて救急車を呼ばれることもあったという。そんな読書三昧の生活のなかで、「出版されていない本」に興味をもつようになる。世界に一冊しかない自筆本や写本には、誰も知らない世界があった。

実家にあった古文書を、くずし字解読の辞典を参考にしながら解読した時のこと。そこには磯田氏の祖先が京都に出張を命じられた時の記録や、藩にお金を貸した記録が書かれていた。教科書には書いていない「不思議な歴史が展開」していた。

■論文は知識のバトンリレー

周りからも会社員に向かない、大学院に行ったほうがいいんじゃないかと言われ研究者の道へ進んだ磯田氏。

これから論文を書く人たちに注意したいのは、「論文には作法がある」ことだという。

“江戸時代の猫と陳皮(※蜜柑の皮を乾燥させたもの。漢方薬の一種)について”を研究する場合を例示。蜜柑の皮には、猫にとって毒になる成分が含まれており、食べてしまうと嘔吐や下痢を引き起こすことがある。そのことを、果たして江戸時代の人は知っていたか？を調査したとする。調べると、“猫が陳皮に何らかの反応をする”という記録を見つけることはできたが、それをそのまま論文に取り上げることは、可能なのだろうか？

磯田氏は、「論文は知識リレー」だという。

まずは先行研究がないか、必ず確認をする。同じ事柄を調査している研究者が他にいないか、いるならその人の研究内容や論文を確認する。論文を検索できるデータベース CiNii で、関連キーワードを検索したり、“猫”“陳皮”で関連書籍を確認したりする。「自分が見つけたことだけを単に書くんじゃなくて、それまで学会コミュニティ・研究者の世界は何を見つけているか。それに対して自分は何を付け加えられたのか。それで次の知識を渡していくっていうリレーをやってる。こういう書き方をぜひしないといけない」。

■書評をする際に大切なこと

磯田氏は、かつては読売新聞読書委員、現在は毎日新聞書評委員としても活動されている。毎日新聞は委員が新聞社との間で書評する本を決める。読売新聞では読書委員会で候補となる本が集められ、持ち寄られ、どの本を紙面で取り上げるか、委員の間で活発に議論していたという。

どんな本を書評するべきか。以下の 4 点を基準として挙げられた。本の価値。世に紹介すべき本かどうか。書評家が適切に論評することが可能かどうか。そして、書くべき内容が欠損していないかどうか。

土壇場で取り上げるのをやめた馬の歴史の本があった。日本には牛馬がいなかったとされる時代の遺跡から馬具の破片が出土したことから、その時代にも馬が飼育されていた可能性がでた。このような「当然触れるべきものが触れられていない」本は「紹介しちゃいけないんじゃないか」と考えたからである。

また「書評を書くには書評本以外の類書も読む」。ほかの本と比較することで、その本の価値や問題点がわかる。そして、なぜ取り上げるのか、なぜ重要か、という点も必要になる。

書評とは何かを考える時、磯田氏おすすめのサイトが「ネット書評空間 ALL REVIEWS」。主催者は、磯田氏が「(現代の)最も優れた書評家」、「文化人のなかでも知識量じゃ巨人」と評する鹿島茂氏である。

■質疑応答を、一部ご紹介します！

Q: 読書をする習慣を身につけたい。読む本を選ぶには、その本の評価を読んでからにしたほうがいいでしょうか、それとも勘で選んだほうがいいでしょうか？

A: 勘のほうが良いと思う。自分で本を手にとって、パラパラと見てみて、その本を面白い、と思うことが大事。強い好奇心と感動する力、それがないと人間は読書ができない。

Q: 紙媒体とインターネット、得られる知識の違いとは？

A: インターネットは、「検索したその部分」のみの情報が表示される。紙媒体の場合は、情報を横に広げることができる。新聞を読む時もそう。目当ての記事の近くに、スポーツ欄もあれば漫画もある。予期しない情報を入手できることが、紙媒体の強み。図書館でも、書棚を歩いてみるのが大切。目的の記事・目的の本以外に、何が見つかるか。これが大事な部分。

Q: 日本史を学んでいくための心がけ・大切なこととは？

A: 歴史は、本人の見方。例えば歴史の教科書なんかは、修学旅行みたいなもの。「ここを見てくださいね」と案内をされる。これが、司馬遼太郎の作品なら、「司馬遼太郎旅行会社」となる。大事なものは、個人旅行。自分なりにいろんな本を読み、自分で歴史の旅をする。歴史は、暗記でもなければ、知識の集積でもない、自分なりのもの見方をもつことが大事。そのために、活字などの情報がある。



書評大賞講演会「私の読書と書評ぐらし」

磯田先生の主な著作を紹介します。

すべて図書館に所蔵があります。



『武士の家計簿：「加賀藩御算用者」の幕末維新』

磯田道史著，新潮社，2003

(210.58||ISO 地下1階)

2003 年第2回新潮ドキュメント賞受賞作品です。

筆者が手に入れた「金沢藩士猪山家文書」には精巧に記された天保 13(1842)年7月から明治 12(1879)年5月までの猪山家の家計簿が含まれていました。

それは、幕末から明治期を生き抜いた一家族の「生活の歴史」でした。

2010 年に映画化されました。

『無私の日本人』

磯田道史著，文藝春秋，2012

(281.04||ISO 2階)

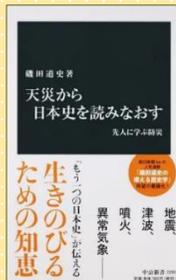
江戸時代に信念をもって生きた3人(穀田屋十三郎，中根東里，大田垣蓮月)の評伝です。

2016 年にはこの中の1人「穀田屋十三郎」を主人公に映画化されました(『殿、利息でござる!』)。

穀田屋十三郎は、武士にお金を貸しその利子で仙台藩吉岡宿(現，宮城県黒川郡大和町)の困窮を救う事業を実現させた9人のうちの1人です。

中根東里は儒学者。大田垣蓮月は尼僧であり歌人，陶芸家。

無
私
の
日
本
人
磯
田
道
史



『天災から日本史を読みなおす：先人に学ぶ防災』

磯田道史著，中央公論新社，2014

(210.17||ISO 2階)

2015 年第 63 回エッセイスト・クラブ賞受賞作品です。

豊臣秀吉の時代から現代まで，日本で起きた自然災害が記録された史料をひもときます。

災害から命を守る先人の知恵や，災害とつきあい，変化していった人間の歴史がうかがえます。

『感染症の日本史』

磯田道史著，文藝春秋，2020

(493.8||ISO 3階)

2020 年新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう最中に刊行されました。

史書，随筆，日記などから日本で繰り返し発生してきた感染症と対峙した人々の知恵を読み解きます。



書評大賞講演会「私の読書と書評ぐらし」

講演会の中でお話しされた「人生を変えた本」や「人生の参考になった本」を紹介します。

すべて図書館に所蔵があります。



◆人生を変えた本

『近世農村の歴史人口学的研究：信州諏訪地方の宗門改帳分析』
速水融著，東洋経済新報社，1973
(611.91||H 地下1階)

第16回日経・経済図書文化賞受賞作品です。
信濃国諏訪郡(現、長野県岡谷市、諏訪市、茅野市および諏訪郡に相当する領域)の宗門改帳をもとに、近世農民の人口動態や社会の推移をあきらかにすることを試みた図書です。

◆人生の参考になった本

『世界の大思想』シリーズ
務台理作〔ほか〕責任編集，河出書房新社，1965-
(108||S||1ほか 地下1階)

世界の思想家たちの名著のなかでも特に、さまざまな思想の原点とも言える著作を完訳したシリーズです。
「人類がこれまで考えてきたことっていうのが凝縮」(磯田氏談)されています。



Q: 最近、この本を読んで新しく視野が広がった、興味を持ったというものはありますか？

A: ホモ・サピエンスに関する本

『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福』(上・下)
ユヴァル・ノア・ハラリ著；柴田裕之訳，河出書房新社，2016
(209||HAR||1-2 3階学部の学び/経営)

2017年ビジネス書グランプリ リベラルアーツ部門賞，
2017年ビジネス書大賞受賞作品です。
人類の歴史が3つの革命(認知革命，農業革命，科学革命)を通して語られています。
発展していった社会は、人類を幸福にしたのか問いかけます。



<第16回 京都産業大学図書館書評大賞 概要>

目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領(抜粋)

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
 - (1) 対象とする図書の所蔵は問わない。ただし、マンガ・雑誌・写真集は除く。
 - (2) 使用する言語は、日本語とする。
 - (3) 文字数:1篇につき1,600字以上2,000字以内。応募原稿様式は図書館 Web サイトから入手(マイクロソフト社 Word ファイル)。
 - (4) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること(盗用厳禁)。
 - (5) その他:1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

117名118篇

実施日程

応募期間:2021年5月24日(月)~ 7月26日(月)
入選発表:2021年11月25日(木)
表彰式:2022年1月19日(水)

<選考委員より ひとつこと>

書評大賞は参加することに意義があります。最大のハードルは書いたあとで投稿することかも。自信がなくても、読んで、書いたら、出すべきです。応募システムがややこしいので、そこはこちら側に改善の余地あり。(加藤)

皆さんの書評を読ませてもらったのをきっかけに、興味深い本を知ることができました。一方で、作品の書評をするからには、読んでみた感想にとどまらず、自らの考えや知見をもっと鮮明に示してもらいたくもありました。(近藤)

古典的な作品も含め、様々なジャンルのものを読んでいるんだなあと感じました。また、「愛」や「孤独」を扱った作品も多く、コロナ禍のなかで皆さんが感じた心情の一端に触れることが出来たように思います。(澤田)

ネットや SNS から様々な情報が簡単に手に入る時代にあつて、図書館や書店に足を運び、本を手に取り、作品と向き合う時間は貴重なのかもしれません。これから多くの本に触れ、ネットにはない楽しみを見つけていってくれたらと思います。(西)

書評は要約ではない。読書量が書評に現れる。著者の他の作品や他の著者の作品との対比から、書評の座標軸が定まる。形だけを真似た書評には、その本の要約と感想しかない。それを超えようとする書評がここに選ばれている。(渡邊)

今回は応募作品数も多く、内容的にも構成や文体を工夫されたレベルが高い作品揃いだったため、選考に苦心しました。また、小説を中心に図書館未所蔵資料も対象となり、新たなニーズを掴むことができてよかったです。(天笠)

はじめて書評を書くことで精一杯だった人も多かったかもしれません。同じ経験をした他の応募者の作品に目を向け自分の作品と照らし合わせてみることも、新たな気づきがあり次回につなげる秘訣にもなるかと思います。(今井)

今年は応募者数が多く、また非常にレベルの高い中での選考でした。書き手が違うと個性も出てきます。入賞した人もそうでなかった人もこの書評大賞の応募をきっかけにたくさん文章を書いてほしいと思います。大学で培った文章力は社会に出てからもきっと役立ちますので。(鈴木)

昨年度はコロナ禍の影響により書評大賞を実施することができませんでしたが、久しぶりの書評大賞の蓋を開けてみると選考にエントリーした作品はどれも秀作ぞろいでした。実際に本を読んでみたいと思わせる書評が多く、読み応えがありました。(山本)

今年度は例年に比べて多くの方から応募いただきました。本などの文章を「読み」、自分の考えを「まとめ」、他者に伝えるよう「書く」技術は卒業後も大きく役立つと考えています。ぜひ次回以降も積極的に応募ください。(島田)